「今日の説教、聴き手のために」　　2013/2/２４　　明治学院教会（30４）

（このプリントは毎週作っているものです）　　牧師　　岩井健作

「見えるものにではなく、見えないものに」　　コリントの信徒への手紙Ⅱ　４章１６節—１８節。

１、　「わたしたちは見えるものではなくて、見えないものに目を注ぎます。」　皆さんいい言葉だ、とお思いになりませんか。私もそう思います。ある新婚の家庭の方が、私たち物質的には貧しいけれど、与えられている愛に目を注いで励みましょう、と言われました。確かにこの言葉には**格言的な力**があります。しかし、この言葉を語るまでのパウロにはそれなりの経過があります。見えるものから、見えないものへ目を注ぐ、その転換点をもたらした力は何だったのでしょうか。そこを読みとりたいと思います。

２、　ここに至るまでに三つの過程があります。

①　「外見のみじめさを経験している」という事。パウロはこれをいや程経験します（参照コリⅡ１１章）。「わたしたちは耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失ってしまいました。・・・・・死の宣告を受けた思いでした。」（コリⅡ１：８－９）。これは迫害の事です。加えて、「あらゆる教会についての心配事」（コリⅡ１１：２８）がのしかかります。さすが強靭なパウロにも疲労困憊が滲みでました。だからこそ外見の見える事柄が一層気になるのが人間です。あえて「見えるものではなく」と強調する所以です。

②　「神の恵みの確かさ」という事。「神の憐れみを受けたもの」の確かさが元気を取り戻させます。「憐れみを受けた者としてこの務めをゆだねられているのですから、落胆しません。」（コリⅡ４：１）。「途方に暮れても失望せず」（４：８）と果敢に語ります。「「外なる人」は衰えても、「内なる人」は日々新たにされていきます。」（４：１６）。神の憐れみの根源的事実が彼を強めます。特に、彼は「ゆだねられた務め」を「キリストのために苦しむことも恵として与えられている」（フィリ１：２９）と捉えます。

③　「イエスの死にあずかる」という事。パウロは自分の外見の衰えを神学的な言葉ではこう言っています。「わたしたちはいつもイエスの死を体にまとっています。イエスの命がこの体に現れるために。わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています。」（４：１０－１１）。イエスの死は、権力による十字架の死です。人間のみじめさのどん底の死です。私たちが困惑する時、イエスの死を想起します。なぜ想起するのでしょうか。「もし、私たちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう」（ロマ６：５）と、そこにこそいのちがあるからです。

３、　パウロは「イエスの死にあずかる」事を、洗礼と関係づけています。「死にあずかるために洗礼を受けた」「洗礼によってキリストと共に葬られ」（ロマ６：３－４）と言っています。洗礼はなぜ受けるのでしょうか。「恵のしるし」という意味を担っています。内実を「しるし」で確認することは私たちも、プレゼントのやり取りなのでしています。しかし、それだけではありません、私たちが自分本位、自己中心（罪）に死ぬため振舞を、イエスの「死の姿にあやかる」（ロマ６：５）と言っています。自分に死ねない「わがまま」な人は、本当の意味での共同性を造り出すことはできません。ここが「見えるものは過ぎ去る」という意味です。死を媒介しない「交わり（共同性）」は所詮虚構で

す。「見えないものが永遠に存続する」とは、死を媒介にしてその彼方にあるものです。本来の、つまり神がイエスによって与えられる「交わり（共同性）」は、見える交わりの空しさ、はかなさの彼方に「目を注」いだ時に現れるものではないでしょうか。愛、信頼、希望です。「見えるもの」から「見えないもの」への転換点は「イエスの死にあずかる」ことです。